

被害者家族を経験して

保護司 野村えつ子

昭和57年7月22日未明 連続放火3件の事件があり、私の実家は全焼し祖父母が焼死、母は2階から飛び降りる時に腰を圧迫骨折しました。幸い、父は無傷で済みました。あとの2件は、飼い犬が吠えたり、早くに気が付いて、無事だったと聞いています。

当時、京都で勤務していた私は、叔母からの連絡を受け、腰を抜かすも気丈に車を運転して伊賀上野に戻りました。当時、完全看護ではなかった病院で、そのまま母の付き添い看病、トイレの世話が始まりました。

あの事件がなかったら、今保護司とは無縁だったかもしれません。事件当時、警察の方が病院に来られ「恨みをかうことはなかったか？」と聞かれ、とても傷つきました。親族も事情聴取されたと思います。

誰かが、病院にお見舞いに来てくださるたびに泣き崩れる母と、悲しくなる私。その姿を見なければならなかった同じ病室の皆様もそのたびに辛かったと思います。

やがて、私は職場の大学に戻ることができましたが、叔母の言葉と兄の思いを汲んで、実家のある伊賀上野に帰ることを決心しました。やがて、月日は流れ時効を告げられました。罪状は放火致死。犯人はどこかにいるのでしょうか。不思議になぜか憎いと思ったことはないのです。

地元で結婚し、事件のことは忘れ、子育て・仕事・家事に夢中で年月が流れました。

上の子供が大学を卒業し、そろそろ誰かの役に立てるような自分らしくできる社会貢献をしたいと思うようになっていました。そして、当時、参加していたNPOの代表者で伊賀保護司会会長をされていた今井氏から保護司のお話をいただき、即答で了解のお返事をしました。その場に居合わせた方は、火事の時に現役の消防隊員として実家に飛び込み消火に当たってくださった森下氏でした。

そして今、私は罪を犯した人が正しい道へ進むお手伝いする保護司をしています。森下氏は保護司の先輩です。以前、森下氏が受け持った対象者を受け持つことになり、相談させていただいたこともあります。人生は生きてると何かしらつながっていると気付かされます。無駄な経験はなかったのだと思えるようになりました。

私が保護司になった2008年から比べると犯罪件数は減少していますが、同じ人が繰り返す再犯率は上昇しています。

不幸にして罪を犯した方々にできるだけ耳を傾け、たくさんの言葉を引き出し 響く言葉を届けていきたいと思っています。

第74回社会を明るくする運動

誰だって、すぐには本音を話せない。誰だって、すぐには希望を抱けない。

誰だって、すぐには変わることはできない

でも、たとえ時間がかかっても、たとえ過去にあやまちがあっても、

誰かと一緒なら希望はある。

声をかけ、背中を押し、あきらめずに寄り添い続ける。

信じて待つ人の存在は、立ち直りへの大きな力になるだろう。

私たちの「待つ時間」は、きっと誰かの「変わっていく時間」。

第74回社会を明るくする運動 パンフレットより

法務省が主唱し、昭和26年から始まった『社会を明るくする運動』も第74回を迎えました。『社会を明るくする運動』はすべての国民が犯罪や非行の防止と犯罪や非行をした人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない安全で安心な明るい地域社会を築くための全国的な運動です。

伊賀市では6月28日に伊賀市推進委員会の総会が行われ、本年度の活動計画が決定されました。7月6日には伊賀市の大山田産業振興センターどんぐりホールで啓発式典(作文コンクール表彰式等)を開催し、その後、市内のスーパー等での啓発活動を行いました。

社会を明るくする運動 作文コンテスト 入賞者

最優秀賞	寄りそう心	伊賀市崇広中学校	3年	南	悠
優 秀 賞	恩送りで広がる笑顔	伊賀市霊峰中学校	3年	稲葉	美織
	「悪気はない」を言い訳にしない	伊賀市城東中学校	3年	山本	実季
	いま、私にできること	伊賀市島ヶ原中学校	1年	中井	璃奈



社会を明るくする運動 啓発式典と啓発活動

※社明運動に市民の皆様からの「愛の資金」を活用させていただいており、お礼申し上げます。

※伊賀保護司会では、犯罪や非行をした人を雇用し、立ち直りを助ける「協力雇用主」を募集しています。